

ハダニの特徴を知る

去年ダニが6月下旬から多発し、多くの生産者が防除に頭を悩ませた。

春先からの高温・少雨・多照により発生しやすい環境下であり、多照による紫外線が薬剤の残効を短くさせたことも、発生の原因と推測される。

気温が高い状況が続くと、ダニの生態が早まる。予察を遅く始めると、一回目のダニの防除が遅れ、後々まで防除することになる。

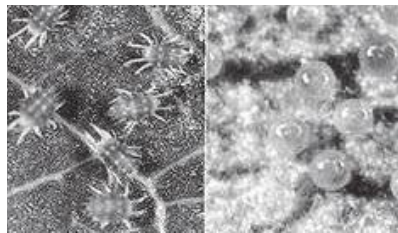
もう一つの問題点として挙げられるのは、ダニの薬剤抵抗性の発達が進んでいる事である。ダニの抵抗性の発達事例は世界的に問題視されており、2011年抵抗性事例報告ランキング10,000件の中でもナミハダニが1位、リンゴハダニが7位となっている。この問題となっている2種類のハダニがランキングの上位に位置している。

さらに、交尾をしなくても卵を産むことが出来るので、短い期間で大量に増殖していくことが可能となっている。

害虫の生態を探る ～ダニの生態について～



名称 オウトウハダニ
卵の色 乳白色～淡黄色
加害部位 葉(葉裏に集団寄生)



名称 リンゴハダニ
卵の色 赤色
加害部位 葉(葉裏に集団寄生)



名称 ナミハダニ
卵の色 透明～白～赤色
加害部位 葉(葉裏に集団寄生)



ハダニの被害と症状

ハダニは、主にリンゴやナシなどの落葉果樹や柑橘類の葉の裏に寄生し、吸汁加害をする。そして吸汁された部分は褐変し、花芽形成や果実肥大、着色に影響を及ぼす。

また、ナミハダニは早期落葉を引き起こすこともあり、秋に発生すると成虫のまま越冬する。

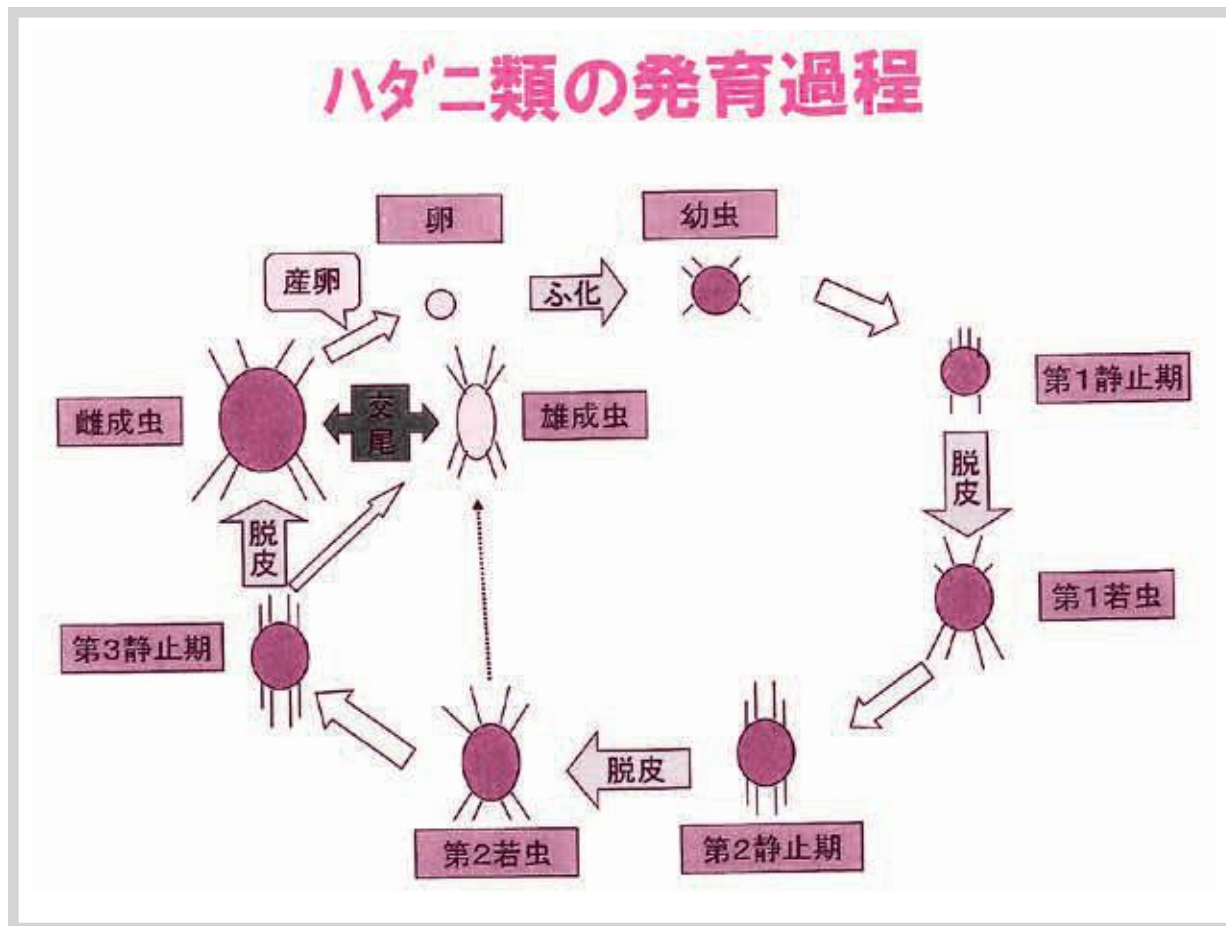
リンゴハダニの場合は枝元にて卵で越冬し、秋の発生により越冬卵が果実のていあ部付近に多数付着することがある。



ハダニの加害により褐変した被害葉

※上のQRコードを読み込むとカラーで各種のダニを見ることが出来ます。

ハダニ類の生態サイクルについて



卵から成虫になるまでの所要日数と9月末までの発生回数

温度	リンゴハダニ	ナミハダニ
16℃	30日	35日
18	23	22
20	18	16
22	15	13
24	13	10
26	12	9
28	11	8
発生回数	6~8回	6~9回

好適な温度 (23℃~27℃) における1雌当たりの産卵数

	産卵数
リンゴハダニ	30~40*
ナミハダニ	約150

ダニの成長サイクルとして上図の流れとなっている。また、ナミ

ハダニではこのサイクル1周が約2週間となっているが、気温が28度前後であれば1週間程に短縮すると言われている。

上図のように気温によってダニの生態サイクルが変わる為、気温が高くなってきた時には、ダニが増殖する前に防除が必要となる。そのため予察をする事を考えておかなければならない。

予察する場所としてナミハダニは樹の根本の小草の葉裏、胴木の幹付近の徒長枝の葉裏、また、リンゴハダニは枝先の葉裏に生息していることが多い為、その箇所を要観察しておくとうい。

そして発生状況に応じた薬剤の選択をしていく事によりその後の防除が楽になる。防除の際には園地の草を刈り、約2~3日後にハダニ類が樹に上がってきたタイミングで散布するとよい。

また、胴木や小草への薬剤到達を考え、銅板や噴口を下に向けるなどの設定をすると更に薬剤の到達が良くなる。

予察など薬剤の選択についてはお気軽に農業振興課にお問い合わせください。